



幕別の駅前にはパークゴルフを楽しむ3世代の像が

パークゴルフ 誕生の軌跡

～発祥の地・幕別町～



パークゴルフ発祥の地として知られる十勝の幕別町。パークゴルフ誕生のきっかけは今から20年以上前。今ではパークゴルフ愛好者は100万人といわれています。

コミュニティスポーツとしてすっかりおなじみになったパークゴルフ発祥の地・幕別町を訪ねました。

グラウンドゴルフからパークゴルフへ

幕別町は帯広市に隣接し、今年2月には忠類村と合併し、人口2万8千人ほどのまちとなりました。町内には13の町営パークゴルフコース、二つの民間コースがあり、町営コースでは年間約40万人がパークゴルフを楽しんでいます。

パークゴルフが誕生するきっかけになったのは、現在NPO法人国際パークゴルフ協会理事長を務める前原^{あつし}さんが1983年に教育委員会教育部長に就任し、社会体育の分野で取り組めるコミュニティスポーツがないだろうかと考えていたところ、前年に鳥取県泊村の教育委員会が中心になって考案したグラウンドゴルフの用具をある職員に見せてもらったことに始まります。

前原さん自身、それまでゴルフ経験もあり、ゴルフの素晴らしさは感じていたのですが、商業化され、プロ化されているスポーツだけに、非日常的なスポーツというイメージがありました。また、年齢的にも、スポーツはやりたいけれど、体力的にはハードなスポーツは難しいだろうし、どこかのスポーツチームに入るのも難しいのではという思いがありました。

そこで、早速、グラウンドゴルフを野球場で試してみたのですが、何か違うと感じたようです。その野球場からの帰り道、前原さんの目に留まったのが、緑地でした。その時、芝生でやってみてはどうだろうと直感的にひらめいたのです。それが結果的に現在のパークゴルフに結び付きます。

早速、幕別運動公園の芝生に穴を掘り、直径20センチの塩ビ管を輪切りにして埋め込み、7ホールのコースを手づくり、グラウンドゴルフの用具で試してみると、これが意外に楽しいことが分かりました。また、教育委員会で子どものいる



パークゴルフの考案者である前原さん

若い世代の女性を中心に試してもらったところ、興味を持つ人たちが現れてきました。

若い世代を中心としたのは理由があります。「私にはゲートボールが頭にありました。ゲートボールは、行政が高齢者スポーツに仕立ててしまったと思っています。でも、それは違うと感じていました。広く町民が楽しむものにすべきではないかと思っていたのです」と前原さん。パークゴルフの原点の一つである、3世代スポーツという考え方があったのです。

少人数から始まったパークゴルフは、当時はまだグラウンドゴルフと呼ばれ、翌年には町内にグラウンドゴルフ同好会が誕生、運動公園のコースも14ホールに拡張し、また、この年には45人が参加して初めての全町大会が開催されます。

さらに、翌'85年には、教育委員会内に役所内の横断的な任意組織としてグラウンドゴルフ振興会議が発足。コース設計や設置工事、標準打数の決定など、よりオリジナルなスポーツとして検討を重ねていくこととなります。振興会議では、まず運動公園の14ホールをゴルフ同様の18ホールに拡張することに取り組み、この年の5月3日にオープン、つつじコースと名付けられ、今も発祥の地のコースとして愛好家に人気の高いコースとなっています。

そして、翌'86年にグラウンドゴルフをパークゴルフと改名、幕別町パークゴルフ協会が設置されます。この年には、十勝管内の体育関係者を対象にした指導者養成講習会なども開催し、周辺市町村への普及にも乗り出します。

パークゴルフ普及に向けて

当初、パークゴルフの用具はグラウンドゴルフの用具をアレンジしたものでしたが、'83年秋に町内にある新田ベニヤ工場(株)十勝工場(現・株ニッタクス)に開発を依頼、試作を重ね、スティック('88年にクラブと改名)

とボールが完成し、'87年に販売を開始します。

また、'87年には外国人を交えた大会を開催しようということになり、受け皿として国際パークゴルフ協会を設立、8月に第1回パークゴルフ国際大会が

開催されます。十勝在住の外国人約30人を交え、180人ほどがパークゴルフを楽しみました。つつじコースと並んで愛好者からメッカといわれている猿別川河川敷にあるサーモンコースもこの年に誕生、翌年には北海道開発局帯広開発建設部がサーモンコースに隣接した猿別川築堤に観覧席を兼ねた親水式の護岸を設置することになり、8月に開催される第2回国際大会に間に合うように施工されました。

'87年には、十勝管内のみならず、全道、全国への普及も始まります。簡単なマナーとルール、町内のコースなどを紹介したパンフレットを作成し、全道211市町村(当時)に発送、普及のためのプロモーションビデオも制作、さらに、全国レクリエーション大会に参加し、全国にパークゴルフを紹介します。

これ以降、町内には問い合わせ、視察などが相次ぎ、道外にもコースが誕生するようになっていきます。'89年には『現代用語の基礎知識』にパークゴルフが掲載され、全国的な広がりを見せ始め、翌年には十勝管内のパークゴルフ場は71カ所、道外にも3コースが設けら



クラブもこの20年で進化、距離や安定性など、改良を加えたことで、楽しみも増すようになった



当初、ティーの使用は義務付けられていなかったため手づくりのティーも。左は、前原さんが机の上に敷くビニールシートを利用して作ったティー

れています。

パークゴルフの完成度向上と社会的信用のために

パークゴルフが全道、全国への広がりを見せると、ルールやコース設置など、スポーツとしての完成度が求められるようになってきました。当初、ルールは指導員が指導するための指導書をベースにしており、指導書が作成されたのは'91年でした。その後、指導書に少しずつ修正を加え、'98年になって正式なルールを明文化しました。また、コースについてもそれまで明文化された基準がなかったため、'93年にパークゴルフ公認コースの基準が国際パークゴルフ協会の理事会で決定されました。

'93年はパークゴルフが誕生したきっかけになった年からちょうど10年になりますが、この年、幕別町では、教育委員会にパークゴルフ振興係を設置します。また、その前年から任意団体であった国際パークゴルフ協会の法人化が事務局で検討されるようになります。当初は社団法人化も目指したのですが、さまざまな制約もあり、最終的には'98年に導入された特定非営利活動促進法に基づいて、コミュニティスポーツを振興する上で最も適したNPO法人化にたどり着きます。NPO法人として認定されたのは、'00年のことです。

「法人化は、やはりこれだけ普及が進み、社会的な信



国際パークゴルフ協会事務所には、国内18メーカーがつくるさまざまなクラブが展示されている

用を得られる組織にする必要性が生じてきたため、早くから検討を始めていました。また、財産や権利の保全も必要です。パークゴルフやクマガラマークなども商標登録し、権利を確保して、協会の運営費を生むようにしなければいけません」と前原さん。

現在、パークゴルフ用品は全国18社が製造していますが、これらの製造業者や公認コース造成主からの公認料が協会の収入源の柱となっています。そのほか、講習会の受講料や加盟団体や個人会員などからの会費収入もありますが、「協会の財政基盤はまだ弱い」と前原さんはいいます。

パークゴルフが地域にもたらしたものは

パークゴルフ誕生から15年経った'98年には、愛好者は約36万人と推計され、海外にも8コースが設置されるなど、大きな広がりを見せるようになっていました。

当初、前原さんには、パークゴルフによる地域経済活性化といった視点はまったくなかったといいます。「今思い出してみると、気持ちは子どもです。単に夢中になれる遊びがほしかったんだと思います。遊びを創造して、遊びの道具も自分たちで創造していく。単にそんな気持ちだったと思います」。

とはいえ、'97年に幕別町教育委員会がまとめた「パークゴルフ振興を通じた社会的・経済的効果に係る調査」では、パークゴルフ入込み客による観光消費額は年間1.5億円、町内にコースが開設されてからの累計では7.2億円と推計され、さらにパークゴルフ用具の町内製造出荷額は3.7億円、市販されてからの累計では16.7億円と推計されており、先の観光消費額を人口一人当たりで換算してみると、累計で約3.2万円に達し、人口一人当たりの税収額8.9万円（町民税）と比較しても、経済活性化への貢献が高いとされています。

「観光入込みは現在年間40万人ほどですが、パークゴルフで訪れる人がかなり多い。発祥の地のコースで

プレーしたいという人が多いのです。ただ、通過型が多いという難点があります。経済波及効果の点ではクラブ製作の方が経済効果として現れていると思います」と幕別町企画室参事の羽磨知成さん。

また、経済面だけでなく、世代間交流や地域内交流、国際交流など、コミュニケーションづくりの効果もあり、合わせて健康促進効果が見られています。'93年に幕別町が行った「健康と医療についての意識調査」では、「友達が増えた」「いろんな年代の人と交流ができる」、さらには「家庭で共通の話題ができた」といった声が見られ、地域や家族との一体感が生まれている上、「よく眠れる」「食事が楽しくなった」「足腰が丈夫になった」「風邪をひかなくなった」という健康増進効果が報告されています。こうした効果は、幕別町に限らず、パークゴルフ愛好家のいるどのまちでも同じことがいえるのではないのでしょうか。

また、これまであまり使われていなかった公園や河川敷など、土地の有効活用につながるという利点もパークゴルフの特徴といえます。

幕別町では、国際パークゴルフ協会が法人化され、一定の基盤固めができたことを受け、'02年4月からパークゴルフに関する担当を企画室に変更しました。

「パークゴルフは単にスポーツではなく、まちづくりという大きな観点から考えていくことが必要です。まちづくりはいろいろな分野にかかわってくるので、統括する意味で企画室が担当することになりました。まちづくりでは、そこに暮らしている人が幸せを実感できるまちかどうか問われます。週末にご夫婦でパークゴルフを楽しんでいる様子を見て、パークゴルフがなかったら住民は何をしていたんだろうと考えます。パークゴルフがまちに与えた影響は大きい」と羽磨さん。

発祥の地・幕別町では、町内のみならず、パークゴルフ場を設置したいという道内、全国からの視察団に対して、パークゴルフによる効果がどのようなものかを



国際パークゴルフ大会の様子

伝えていくという役割も求められているといえます。前述の経済効果調査、健康と医療についての意識調査など、各種の調査実施はそうした背景があったといえます。現在は以前に比べて視察団の対応は減ったといえますが、幕別町の取り組みを学んで、まちづくりの一つのツールとしてパークゴルフを活用する地域も見られるようになり、幕別町発祥のパークゴルフは、まちづくりの観点でも全国的に果たした役割は大きいといえるでしょう。

今やパークゴルフといえば道内の多くの人が幕別町を思い浮かべるでしょう。その意味では、今後はパークゴルフを幕別町の地域ブランドとしてさらに磨きをかけ、魅力ある地域づくりや活性化など、地域の財産として次代につなげていくことが期待されます。

コミュニティスポーツとしてどうあるべきか

来年、国際パークゴルフ協会は設立から20周年を迎えます。'05年現在、道内には770コース（うち公認コース172）、道外コース200（うち公認コース66）、海外コース33、愛好者は100万人といわれています。その一方で、20年を迎えていくつかの課題もあると前原さんはいいます。

「最初の10年は技術もそれほど大きな差はないの

で、それなりに楽しくプレーできたのですが、20年となると、やはりレベルの高いプレイヤーも出てきて、競技性の高いスポーツになってきます。でも、そういう技術のある人たちもいるし、初心者もいます。毎日練習している人と、たまに遊ぶ人たちとの間に乖離^{かいり}ができるようになったと感じました。パークゴルフ発想の理念は、いろいろな世代の人たちが遊ぶためのスポーツを創り上げること。ですから、初心に戻って、互いを認め合いながら、パークゴルフを共有していかなければいけないと思っています。もちろん競技志向が駄目だといっているわけではありません。レベルの高い大会もあれば、新人の大会もある、町内会レベルの大会もあるし、職場のコンペもある。それぞれがそれぞれの楽しみ方を認め合うことが大切だと思っています」。

また、近年は愛好者に高齢者が多くなっているのも事実。若い世代への啓蒙普及も課題の一つです。そんな中で、幕別高校では'98年から生徒と町民の交流を図ろうと、国際パークゴルフ協会によるルールとマナーの講義、幕別町パークゴルフ協会による実技指導など、パークゴルフを授業に導入しています。これは、学



幕別町の看板にはパークゴルフ協会のシンボル・クマガラマークが

生と住民の交流を深めるだけでなく、地域への愛着にもつながり、地域としての一体感を醸成するきっかけとなっているといえるでしょう。

いくつかの課題は見られるものの、大きな広がりを見せているパークゴルフが多くの地域でしっかりコミュニティスポーツとして根付いていることは、北海道発のスポーツとして誇れることといえるでしょう。

前原さんは、地域とスポーツは密接不可分の関係にあるといいます。「私は、スポーツは遊びと考えています。昔は、スポーツは極めてハードでかつ素質があって鍛えられたエリートのもので、草野球でも多くは眺める側だったと思います。パークゴルフが生まれたころは、地域社会が成熟し、生活レベルも上がって、地域に出ていろいろなことをやりたいと思う人が増えてきた時代だったと思います。そういう中で、スポーツはエリートのものでなく、スポーツに縁のない人たちにもできるスポーツがあるということを伝えたかったのだと、今になって思います。私自身を振り返っても、パークゴルフによってコミュニケーションが広がっていったことが最大の収穫でした。今思うと、一番意識したことはコミュニティだったと思います。だからこそ公園が舞台になったのです。そして、それは健康にも結び付きます。コミュニケーションを広げていくことがパークゴルフの原点で、それは地域づくり、まちづくりにも格好の道具だと思っています」。

多くのスポーツが競技性を志向する一方で、競技性だけでなく、底辺の広い、誰もができるスポーツであることにこだわりつづけるパークゴルフ。地域の一体感を創り上げるコミュニティスポーツとして、また、競技性も兼ね備えたスポーツとして、これからどんな展開を見せていくのでしょうか。